



「雪だるま」が20体も……

北海道の塾生さんから「雪だるま」が20体も居並んだ写真を添付したメールが届いた。

冬の夜は、マイナス20度に冷え込む中空知地域。そこで在宅介護

背丈は大人ほどもあり、敷地内を口の字を描くようにして並んだ光景は壮観の一言に尽きる。

実は、丸い型枠に小麦粉のような雪を詰め込み、水を加えて足で踏み固めるという作業を繰り返しながら大玉1個がつけられていた。

## 転期に立つ経営の視座<sup>23</sup> 塵も積もれば山となる

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。1991年に独立。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に『99の言葉の杖』(日本医療企画)、『早川浩士の常在学場』(筒井書房)、『介護人財創造塾』(筒井書房)、『介護保険改正に勝つ! 経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

<http://www.hayakawa-planning.com>

ブログ: <http://ameblo.jp/hayakawa-planning/>

事業(居宅介護支援事業所、訪問介護、デイサービス、認知症デイサービス、グループホーム、サービス付き高齢者向け住宅など)を展開する法人の管理者から。

雪質は、パウダースノー状態だからサラサラ。コロコロと転がしただけではつくれない「雪だるま」。

まず、2つの大玉をつくり、1つを胴体として固定する。もう1つはシヨベルカーで持ち上げて乗せる。頭部とはいえ、人が持ち上げられるほど軽くない。

「雪だるま」をつくらせて設置する作業は、平日2日間に及ぶ。コの字状に取り囲んだ事業所の建物から

は、手の空いた職員が入れ代わり立ち代わりの総動員で行われる。

その一部始終を窓越しから眺める利用者。近隣の人たちも。

このような作業に職員の貴重な「時間と手間」を投入して良いのかと考え込んでしまう人がいたとしても不思議なことではない。

総がかりでつくるようになったのは、ここ数年のこと。当初、数人の職員で始まったことが、いつしか誰もが心待ちとなるような行事に大きく変わってきたという。

### 大事の前の小事

大きな事を前にしたら、取るに足らない小さなことはどうでも良いことである。

逆に、大きな事を成す前には必ず小さなことがあり、その小さなことの積み重ねが重要である。

どちらも「大事の前の小事」の諺を言い表している。

介護の仕事を前にしたら、取るに足らない「雪だるま」づくりはどうでもいいことではないのか。

それが、介護の仕事を成す前には必ず毎冬になると「雪だるま」をつくり、その積み重ねが重要であることを職員の誰もが気づかされ

たからこそ、わずか2日で20体も的一大傑作をつくり上げることができたのである。

小事を疎かにしてはならないという戒めを「塵も積もれば山となる」という。

どんなに小さなことでも、こつこつと積み重ねていけば、やがて大きなものになる。毎日の一つひとつの小さな行為も長年かかって実行すれば、結果として経験や成果となって現れてくる。

真冬の「雪だるま」づくりは、雪が溶けて春を迎えたころになると「バラ園」づくりへと舵を切る。

バラの栽培も簡単ではない。苦々しい何年もの失敗を経験してきた職員がいて、それを見続けてきた利用者がいる。

今では、「雪だるま」と「バラ園」の話題が地域に広がり、わざわざ見学を訪れる人で賑わいを見せるまでになってきた。

物事が短い期間では完成しないことを「手間暇がかかる」という。

「労力がある」「エネルギーがある」「一朝一夕にはいかない」と匙を投げず、「時間と手間」のかけ方の真意を実践した人材育成の取り組みであると高く評価したい。